Murder　Carnival

月明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｍｕｒｄｅｒ　Ｃａｒｎｉｖａｌ

【Ｎコード】

Ｎ９１５４Ｕ

【作者名】

月明

【あらすじ】

とある学校の文化祭の準備をしていた１年Ｂ組の五班の人たち・・・

・

でもその人達は・・・知らずに、少しずつ、触れてはイケナイ領域に踏み込んでしまっていた・・・

（これはミステリーなのでミステリー嫌いの方は戻る事を推薦いたします）

祟祭り編　　～祟嵯シ～

この小説はフィクションです。実際にある団体、学校名、個人名等は一切関係がございません

○×県鶴ヶ峰市祭金（けんつるがみねしさいきん）

１９９３年１０月１７日　日曜日

俺達が通ってる学校は「御真神学院高等学校（みまかみがくいんこうとうがっこう）」と言うんだ。

私立の学校で、マイナーな学校だ。

それで

明日の月曜日はここの学校に祭ってある「真神様（まがみさま）」を讃える祭り・・・一般的には「文化祭」と言うやつである。

～生徒棟１Ｆ　１年Ｂ組教室内　１９９３年１０月１７日日曜日

１９：２５～

「あ～あ・・・なんで休日の夜まで学校に居なきゃいけないんだろ・・・」

っと、高校生には正論な事を言うこの女子は・・・１年Ｂ組の佐野（さの）香奈子（かなこ）である。

「ま、俺達が五班だから仕方ないよ・・・」

っと、香奈子を　宥（なだ）めるこの男子は・・・１年Ｂ組の高橋渓太（たかはしけいた）である。

「高橋はめんどくさくないのかよ？」

「ま、俺は大丈夫だけどさ・・・」

っと、めんどくさそうに渓太に同意を求めるこの人物は・・・1年B組の加藤真悟(かとうしんご)である

もうお分かりだと思うが、1年B組の五班の人たちは文化祭の準備をする事になっている。・・・それはくじで決められた事なので、同情に値するものだった

「よし、みんなあと少しだよ！　頑張ろう」

っとみんなを励ましてるのが1年B組の　倉橋誠也(くらばしせいや)だ。

「あ、高橋さん。職員室に行って小山先生を呼んできてくれますか？」

「あ、わかりました」

っと、敬語を使うのが特徴のこの女子は・・・1年B組の　水島(みずし)真菜(ままな)　である

「ったく・・・めんどくせぇな・・・」

っと、愚痴をこぼしてるのが、1年B組の　永山海堵(ながやまかいと)　である。説明するまでもないが、今紹介した渓太、香奈子、真悟、誠也、海堵、真菜の6人は、同じく1年B組の五班に所属しているメンバーである。

〜特別棟3F　職員室前廊下　10月17日日曜日　19：57〜

職員室前の廊下の曲がり角で1年B組担任の小山先生と校長先生が

如何にも深刻そうな顔をして話してるので、何故か知的好奇心にくすぐられ、盗み聞き（少し酷いが）することにした・・・

「・・・今年は如何でしょう？」
「きっと大丈夫だよ。今年は絶対にない」
「でも！　私は中止するべきだと・・」
「今年も伝統に則って文化祭を行う。ちゃんと真神様にはお祈りしておくよ」
「またなければ良いですが・・・」

『真神様の祟りが・・・』

「え・・・？」
「あ、高橋君。どうかしましたか？」
「では、私は職に戻るよ」
「わかりました」

「えっと・・・あ、教室に来て欲しいと真菜さんが・・・」
「分かりました。行きましょう」

「・・・・」

その真神様はうちの学校で祭ってある神様である。・・・初代校長が厚く信仰していたから・・・だそうだ。そんな話を前に友達から聞いたことがある・・・　こう言う祟りなどの都市伝説には知的好奇心が働くのが、俺である。

「あ、あの・・・ちょっと遅れるっと言っておいてください」
「え、高橋君・・・？」

だから如何しても調べてみたかった・・・まぁ、それは俺の性格上なのかもしれないが・・・

祟祭り編（2）　～赤キ聖痕～

～生徒棟４Ｆ　図書室内　１０月１７日日曜日　２０：０６～

真神様・・・あった・・・これは・・・昔のレポートだろうか？

真神様の祟りについて

我が学び舎に祭ってある神、真神様はこの学校の平和を維持するために、我が校の生徒を捧げる事が必要不可欠である。その捧げる儀式は数年に渡り、行われ続けていた。

しかし、誰が選ばれるかは誰も知らないのだ。生贄方法も人数も過去のデータから見ると

「事故」「自殺」「他殺」「失踪」との様にバラバラなのである

日時は我が学び舎の伝統である文化祭の夜・・・つまり、１０月１８日の夜に行われると言う。

過去のデータを見ると、警察の発表でも一致しているのが分かる。

警察は何れも人の手による犯行だと見ているが、他殺にしろ失踪にしろ何故か手掛かりが全く無い。

しかし歴代校長は何れも「学校の名誉にかかわる」として公の場にはださないし、マスコミにも流れていない・・・誰が犯人なのだろうか？　この謎は未だ明らかになっていない・・・

記１９８５年８月２６日　　学校心霊研究部部長　３年Ｃ組　皆本孝

「・・・・」

あの話はどうやら迷信ではないらしい。祟りは毎年行われているようだ。
このレポートによると、祟りは明日に行われるらしい・・・
因みに文化祭は２１：００まで行われ、その後全校生徒で片付けをする。
・・・ま、俺は信じないので気にはしないようにしよう。

その後、何とか頑張り・・・帰りはもう２３：００ぎりぎりになっていた

～生徒棟１Ｆ　１年Ｂ組教室内１０月１８日月曜日　２２：４３～

今日は凄く楽しかった。　出し物や劇等を色々見て回った。
文化祭が楽しかったせいで祟りの事なんてすっかり忘れていた・・・

「今年は何もなくてよかったです・・・では、解散しましょう」
「もちろん、偶然が重なっただけ・・・今年は何もなしですな！」

っと、校長先生は校長室に戻った

「先生さよ～なら～」
「気をつけてかえるのよ～」

・・・ゴトンッ・・・・・・

「い・・・嫌ぁぁ！！」

「どうしましたか！」
「あ・・・ああ・・・た・・・拓海君が・・・」
崇り殺されました・・・
「・・・は？　うっうわ・・・・」
「・・・なんだよ・・・これ・・・」
俺達は唖然した・・・飛び出して廊下に出てみたのだ・・・そしたら・・・
「危ないから近寄らないで！！　・・・これは・・・ピアノ線・・・・でしょうか・・・？」
小山先生は急いで・・・駆け寄り、見えない紐状の物を拾っていた。
何でも、「坂井拓海」（1年D組）が走って昇降口に向かったらいきなり首から上が取れたらしい・・・
どう考えても死んでいる。　それを近くで目撃したのは1年D組の前苑奈菜子である。
「何でこんな物がここに・・・？」
「あ・・・ああ・・・あ・・・」
「前苑さん？　大丈夫ですか？」
「あ・・・え、ええ・・・」
っと、震えている前苑さんを真菜が駆け寄り背中を撫でていた
すっかり忘れていた・・・昨日の事だったのに・・・気を付けなければいけなかったのに・・・！

「みなさん、良く聞いてください！　実は去年も同じような事があり、数名の生徒が亡くなりました。
今年は何としても避けたいのです！　焦らずにかつ慎重に帰宅してください！」

そう小山先生は叫びながら教室を回った。そうしたら一斉に昇降口や、窓から出ようとする人で溢れた。恐らく、みんなパニックを起こして焦ってあるのだろう・・・何故か俺は教室から動かないようにした。その時・・・

バチンッ！　バチバチバチバチンッ！！

・・・突然大きな音が響いた・・・一気に静まり、人が倒れて行くのが見えた・・・あれ・・みんな？

「・・・せ、先生・・・これって・・・・」
「え・・・え・・・え？」

昇降口に立って何かを見つめてる先生に駆け寄り、その状況をみた・・・

「これって・・・・」

誠也が言葉を失う・・・

「え・・・え・・・ま、前苑・・・さん？」

真菜が先生と俺が見つめている　人　を見て、よろけて後退った・・・

その　人　とは・・・・

祟祭り編（3）　～疑イノ宴～

その　人　とは前苑さんであった。今回の目撃者は小山先生のみである。　昇降口と窓の近くで生徒が山積みになっていた・・・　その中には前苑さんの姿もある・・・　みんな目を見開いた状態で、動かない・・・

「ま・・・前苑さん！！」
「やめなさい！　水島さん！」

前苑さんに近付こうとした真菜を小山先生は引っ張って遠ざけようとしていた。
まだ、みんな状況が掴めない中・・・誠也と小山先生が口を開いた・・・

「これは・・・恐らく・・・」
「・・・ええ」

誠也が顎に手を当て、小山先生はうな垂れている・・・

「どう言う事だよ！！　もったいぶらずに教えろよ！！」

真悟が怒鳴って言った。・・・パニックになっているのだろうか・・・そして、誠也が静かに口を開く・・・

「・・・感電死・・・でしょうね」
「へぇ～・・・」

っと、海堵は興味なしと言った状態で横たわっている生徒達を見て

いた

「・・・同感です」

っと、小山先生が同意した・・・

「恐らく、取っ手の部分に５０～１００ｍＡの電流が流れているらしいですね・・・」

「どうして・・・わかるんだ？」

「前に推理小説で読んだことがあるんだ」

「でも・・・そんな電流って・・・誰が・・」

・・・俺はなんとなく外を見た・・・？　何かがおかしい・・・あ、そうだ！

「・・・おかしいな・・・」

「え・・・？　高橋・・・？」

「あ、いや・・・外が暗いなって・・・真悟はどう思う？」

「そりゃ、夜だからな・・」

・・・違う・・・俺は少しイラつきを感じた

「・・・ああ、そう言うことだね・・・高橋君？」

「・・・ああ」

誠也は分かってくれたみたいだ・・・

「・・・ほら、校庭付近と門への行く道に外灯があった・・・そうだね？」

「・・・ああ」

そう言う事だ・・

「おかしいですね・・・夜は防犯のためいつも付けるように・・・」

っと、小山先生はボソっと言った

「・・・にしてもさ・・・誰のせいでこんな事になったんだっけ・・・？」

海堵が静かにそう口にした・・・誰のせいって・・・

「コレも人の手による犯行だろ？　真神様かなんか知らないけど・・・崇りなんてあるわけないだろ？」

「・・・なるほど・・・」

「つまりさ、現時点での重要危険人物はさ、生徒に避難と解散を命じた人・・・だろ？」

「それって！！」

「ち、違う！　私じゃない・・・」

真菜が珍しく大声をあげた。　・・・海堵が言いたいのは「小山先生がみんなを殺したんだろ？」って言う事だ・・・

「・・・あれ・・・俺は誰とは言ってませんが・・・？」

っと、海堵がニヤリと笑う・・・

「そ、それは・・・・」

「・・・あれ・・・香奈子ちゃん？」
「ん、どうしたの？　真菜ちゃん？」
「ああ、ううん。静かだったからさ・・・」
「・・・あのちょっといいかな・・・？」

っと、香奈子はみんなの前に出る

「その・・・前苑さんが死んだあの感電死はもっと大掛かりな事だと思うの・・・」
「どう言う意味・・・？」

っと、真悟は聞き返すした・・・それは同感だ。大掛かり・・・？

「だって、今日中に窓と昇降口にもこんな量の電流を流すんなら、絶対に誰かに見つかってないとおかしいでしょ？」

「・・・ああ、そうか・・今日は文化祭だったっけ・・」

忘れてしまっていた程に凄く酷いこと続きだった・・・　先生は警察に通報するべく職員室に戻った。
この学校は携帯の持込は厳禁だ。一応確認してみたが、全員持っていなかった・・・
どうなってしまうのか・・・恐らくもうこの学校は密室だろう・・・
みんな揃って脱出できるのか・・・？

崇祭り編（４）　～想イ探シ～

その後・・・真悟が口を開いた

「そう言えば・・・文化祭で生徒棟は使わなかったな・・・」

「そうだよね・・・しかもこんな大掛かりで大作業・・・犯人は複数居るのかもしれないね」

その時、真菜が大声をあげた・・・

「あのさ！　こんな話をしていても・・・仕方ないと思うの！　ただ誰も信じられなくなって・・・」

「つまり・・・？」

「その・・・みんなで固まって他の生存者の人を探さない？　って事・・・」

その瞬間、海堵が即答した・・・

「俺はパス、動きたくねぇし・・・」

「永山・・・大丈夫なのか？」

「あぁ・・・もちろん」

「じ、じゃあ・・・行こうか」

「いってらっしゃ～い」

～生徒棟２Ｆ　二年生教室前廊下　１０月１９日火曜日　２：１８～

・・・俺達は、まず二年生の教室を探すことにした。　俺達の学年はおそらく・・・もう居ないと思ったからだ。

「って・・・今何時だろうな・・・」
真悟がボソっと言ったので、俺は・・・
「あ、教室の時計見てくるよ」
「ああ・・・サンキュー、高橋」
・・・・嘘・・・・夜中！？
「夜中の２：２０分だとさ」
「もうそんなに経ってるのかよ・・・早いな」
「たしかにな・・・平日の高校生ならもう寝ている時間だな・・・」
これは、おそらくの事である。　・・・ま、そこまで起きてると寝起きが危ないような気がするが・・・
「俺は～・・・ゲーム中だな」
「お前な・・・」
良い子は真似しない事を著者としておすすめする・・・
「ん・・・香奈子、どうかしたか？」
「ん・・・ん、別に？」
「そ、そうか・・・」
俺は先頭に行き、曲がり角をまがった・・・その先には、大勢の生徒が倒れていて・・・道が阻まれている
「高橋どうした・・・うわっ」

っと、みんなが唖然しているなか、誠也が静かに口を開いた・・・

「・・・ここを通るのは危険だね・・・死体に触れたら感電するかも・・・」

「も、もしかして・・・みんな・・し、し・・・」

真菜がしゃがみこんだ。・・・無理も無い　俺達はゲームの中の主人公でもないし普通の高校生だ。

・・・もちろんみんな遺体は初めてだろう・・・もちろん俺もだ。

でも・・・なんだかもう慣れてしまったような気がした・・・そんな自分が恐ろしい・・・

「・・・僕達以外・・・生き残ってる人は居ないのかも・・・ね」

っと、誠也が俯きかげんに下を向く

「そんなの分かんないだろ！」

「・・・ありえる話だよ・・・ここは無難に大人しく警察を待つほうが良いのかもしれない・・・」

っと、誠也は冷静に分析した。　相変わらず真悟は落ち着いてないようだ・・・。　そして俺が割り込んでみる・・・

「まぁ・・・情報収集には上の階も特別棟も調べたいところだな・・」

「でも・・・危ないよ・・・」

「私も賛成しない・・・」

「俺は賛成だぜ。小山先生の様子も見に行かなきゃな・・・」

っと、落ち着いた様子で真悟は頷いた。そして誠也は深く考え込むようにして唸っていた

「ん～・・・危険だけど・・・やったほうがいいのかも・・・」
「あの方法って・・？」
「あまりおすすめ出来ないけど・・・２グループになって行動した方が良いのかもって・・・・」

そして真菜が考える様子でこう言った

「なるほど・・・ここでの意見は二つに分かれてる・・・まず、教室に待機するのは倉橋さん、私、香奈子ちゃん・・・それで、捜索したいって言ったのは高橋さんと加藤さん・・・って事ですね？」

「俺は・・・それで良いかな」
「・・・仕方ないね・・・じゃあ、僕達は1年B組の教室にいるから・・・」
「おう、分かった」
「・・・気をつけてね・・・何かあったら戻ってきて・・・」
「なるべく物には触れないように・・・ね」
「おう。じゃ、行ってくる」

こうして俺達は二手に分かれて行動する事にした。
危険だとは分かってるが・・・何故かそうしてしまったのだ。
これからどうなるか・・・分からない・・・　でも、警察が来ない限り俺達には安息はないのだ・・・
眠い・・・すごく眠い・・・その中俺達は出発した・・・

憑き殺し編　～希望ノ悲鳴～

俺は今、階段を上り三階へ来ている。　想像しがたいと思うが二階の廊下はT字路になっていて、左には死体が山積みになっていて誠也達と別れたところである。左には行かずずっとまっすぐ行くと階段があったので上ったと言う事になる

「三年も誰もいない・・・か」
「あるのは・・・死体ばかりか・・・」
「ま、血が出てなかったぶん・・・探しやすいのかもしれないな・・・」
「・・・たしかにな・・・ってそれにしても、もう何とも思わなくなっちゃったな・・・」
「いわゆる死体慣れって言うやつか？」
「・・・残念な事にな・・・って警察はまだ来ないのか？」
「先生が連絡してくれてるだろうけど・・・」
「・・・ま、これで分かったが・・・この棟に生存者は俺達だけ・・・だな」
「ああ・・・そう・・・だな」
「じゃ、特別棟に行こうぜ」
「はぁ・・・色んな意味で嫌だな・・・」

どう言う意味かと言うと、特別棟は理科室や家庭科室や音楽室・・・と言った学校の怪談には定番の場所がてんこ盛りなのだ。・・・高校生にもなってそんな事を信じてるのが馬鹿らしく思うが、もうすぐ丑三つ時と言うやつになる・・・　もちろん、補習でもこんな遅くまでは居ないので夜中の学校は初体験なのである

～特別棟１Ｆ　廊下　１０月１９日火曜日　２：５８～

「不気味だな・・・」

俺の開口一番はそれである

「・・・そうか？」

「・・・」

俺は何としてでも幽霊嫌いを隠そうとしているのだ

「・・もしかして高橋・・・ビビってるのか？」

「んな訳ないじゃん！」

・・・・バレてしまった・・・

「何か怪しいぞ～？　・・・もしかして高橋って・・・」

「ほら、さっさと行くぞ！」

「・・・なぁ・・・見学でもしないか？」

「・・・何を？」

「ほら、学校の怪談に良く出てくるところが満載なんだぞ？　面白そうじゃないか？」

「・・・別に？　俺は・・・興味ないし」

・・・一番言われたくない事を言われてしまった・・・

「そんな暇ないぞ？　早く職員室に行かないと・・・」

「こう言う機会は二度とないんだぞ？　良いじゃないかよ」

「・・・無くて結構」

「ほら、こう言うところが一番定番じゃね？」

そう言って真悟はある教室を指で指した。　そこには「理科室」と書かれていた

「もうすぐ職員室に着くんだから・・・」
「いいじゃないかよ・・・ほら！」
「ってちょ！！　・・・ったく・・」

～特別棟３Ｆ　理科室　１０月１９日火曜日　３：０５～

「ほらほら、これこれ！！」
「・・・うわ・・・」

真悟が楽しそうに指差したのは人体模型と骸骨であった

「・・・」
「・・・そんなに見つめても動かないと思うぞ？」

っと、遠回しに早く出ようと訴えたが・・・

「・・・あ、動いた・・？」
「・・・風か何かだろ？」
「・・・窓閉まってるじゃん？」
「は・・・？」

・・・・・ヤバイ・・・そう言えばここの学校の七不思議に理科室の骸骨って言うのを聞いたことがある・・・それは夜中に骸骨が徘徊し、見つけた人を・・・って言う噂だ・・・あくまで噂だが・・・

「・・・・うわ！」

「何何々？・・・・」
「・・・なんちゃって～・・・・驚いた？」
「・・・・っ・・・・」

内心は凄くホッとした。完璧に弄ばれてたようだ。　よくよく考えればありえない話である

「じゃ、お先～」
「っちょ、待てよ！」

真悟が走って出て行ったので、俺は急いで後を付けた。　・・・・ってこんな所に置いていかれるのも気味が悪い・・・と言うものだ

～特別棟３Ｆ　職員室中　１０月１９日　３：１５～

「失礼します～・・・小山先生？」

呆れた・・・こんな状況なのに小山先生はすっかり机を枕代わりにしてうつ伏せ状態だ・・・寝てるな？

「先生～・・・お～・・・・」
「・・・加藤？」

真悟が先生の元に駆け寄り、揺り起こそうとしたが途中でやめ・・・後退りしていた。・・・顔が真っ青だ・・・

「・・・加藤？」
「・・・た、高橋・・・これ・・・」
「ん・・・うわ！！」

俺も小山先生の机に行って見ると・・・机の上が真っ赤に染まっていた

「・・・起こしてみるか・・？」

っと、真悟が尋ねたので・・・

「いや、やめておこう・・・真悟、脈の測り方は分かるか？」

「ちょっと待ってろ・・・」

普通を手首で測るものだが、真悟はより確実な首元を触っていた

「・・・こりゃ・・・駄目だな・・・」

「死んでるのか・・・現場保存ってやつだ・・・近寄るな」

「お、おぅ・・・」

っと、少し刑事っぽく言ってみたものの・・・俺も動揺は隠せないようだ

「あ、警察に電話は！！」

「・・・恐らく、時間が経ってるのに警察が来ないって事は・・・電話をかけようとして襲われたんだな」

っと、俺は静かに自分の推理を述べてみた・・・

「じゃあ、電話しなきゃ・・・１１０番だったよな？　・・・あ、あれ・・・」

受話器の線が切れていた。どうやら鋭利な刃物で切られたらしい・・・老朽で切れたのとは絶対に違う切れ方だった・・・

「じ、じゃあさっきの公衆電話は！　公用は無料だろ！」

っと、叫んで真悟は職員室を飛び出して行った・・・でも数十秒に肩を落として帰ってきた・・・

「・・・一応聞くけど・・・・どうだった？」

「だめだな・・・また受話器の線が切られてる」

「・・・外への連絡手段は・・・０か」

恐らく公衆電話は全部無理だろう・・・　職員室を探し回ったが、携帯電話もない・・・

ここは警戒しながら警察を待たなくてはいけないのだ・・・

俺達はそのバッドニュースな情報を伝えるために１年Ｂ組の教室に向かった・・・

恐らくみんな・・・待ってるだろう・・・

それか・・・犯人に殺されてるかだな・・・そうは思いたくない

誰が犯人か分からないが、これは許されるべきではない・・・必ず罪を償わなくてはならないのだ・・・・

憑き殺し編（2）　～聖者ノ棺桶～

～生徒棟１Ｆ　１年Ｂ組教室　１０月１９日火曜日　２：３４～

「・・・はぁ」

何故か凄くへこんだ気分になった・・・　何かもやもやしているような感じ・・・

誠也君は自分の机に座って考え事をしているようだ

私も自分の席に座ることにした

「どうしたの？　さっきから溜息ばかり・・・」

っと、幼馴染の真菜ちゃんが声をかけてきた

「何でもないよ・・・はぁ」

「もしかして・・・好きな人が居たりして？」

「ふぇ？　そんなわけないでしょ！　いきなり何て事を・・・」

「何か凄く怪しいんですけど～？」

「怪しくない！　怪しくなんか・・・」

「ズバリ！　幼馴染の渓太君でしょ！」

「えぇ！！　な、なわけないじゃん・・・って第一真菜は高橋さんって呼ぶでしょ？」

「い～のい～の。　・・・で、渓太君に逢いたいんでしょ？」

「う、うん・・・」

「あれ？　それって・・・」

「あ、そう言う意味じゃ・・・」

「あ～、それって自白～？」

「ち、違うって！」

「相変わらず素直なんだから～」
「あ～も～・・・トイレ行って来る！」
「いってらっしゃ～い」

～生徒棟１Ｆ　１年女子トイレ　１０月１９日火曜日　２：４９～

「はぁ・・・」

水道場の淵に手をつけて鏡を見てみた。　暗くても分かるくらい顔が真っ赤だ・・・
あのモヤモヤした気持ちが真菜ちゃんのお陰で分かったような気がした・・・私は・・・
顔の熱を冷まそうと蛇口を捻り、水を出した。そして水を顔にバシャバシャとかける
・・・熱もひいて気持ちも落ち着いたが、同時にこれは夢ではないと冷たさで立証されてしまった。
・・・そしてしばらくボーっとしていた。　・・・こんな事をしていて犯人に見つかったら洒落にならない・・・と思い廊下に出た

～生徒棟１Ｆ　１年廊下　１０月１９日火曜日　３：３４～

「ん・・・」

誰かの人影を見た。あの方向からすると階段を上っているようだ・・・
生存してる生徒かな・・・？　その可能性を見つけた私はそのグッドニュースを知らせるために教室に戻った。　何故か人影を追いかけようなんて思わなかった・・・面倒臭かったからかもしれないとりあえず、まだ顔と体が火照ってるので・・・ゆっくり歩いて行った。

あまり気持ちよくないが・・・秋の夜中なので涼しい。

～生徒棟１Ｆ　１年Ｂ組教室前　１０月１９日火曜日　３：３５～

おかしい・・・何かがおかしい・・・胸騒ぎがする・・・それでも教室のドアを開けて中に入った・・・そこにいたのは・・・

「え・・・真菜・・・ちゃん？」

まるで台風でも来たかのように机と椅子がバラバラに置いてあった。そして教室の奥の方に・・・真菜ちゃんが横たわってる・・・えっと・・・

「い・・・いいい・・・・・・」

言葉が出なかった・・・そして１分ほど放心していた・・・目の前の現実を否定した・・・

真菜ちゃんの額に・・・ナイフのようなものが突き刺さっていた。

・・・近くで見ると・・・

目は見開いていて、髪はボサボサに・・・そして服も乱れきってた。

よく見ると胸と腹あたりが・・・真っ赤に染まっている・・・これは確実にわかる・・・死んでいるのだ

「あ・・・あ！　誠也君は・・・！」

私は真菜ちゃんから離れ、教室中を探し回った・・・そしたら・・・

「いい・・・嫌ぁ・・・いや・・・！」

教卓の黒板側に仰向けになって誠也君が倒れていた・・・そして・・

喉にはナイフのようなものが・・・刺さっていた。

私は走って教室を出た。鉄の臭いが充満していて、吐き気がした・・・

そして私はがむしゃらに走った・・・その時・・・窓に手をかけて居る生徒がいた・・・暗くて顔は見えなかったが・・・

「あ・・・だめ！　触っちゃ・・・」

「・・・ッチ」

「え・・・？　え・・・」

その生徒は私の方に走ってきて、止まった・・・その瞬間に腹部に激痛が走る・・・

・・・刺されたの？　・・・って事は・・・犯人は・・・この人？

「・・・ったく・・・まだ生きてたとはな・・・」

「うっ・・・う・・・」

私はその場でうずくまった・・・そして・・・意識が遠のいていく・・・ああ・・・この人は・・・たしか・・・

そこで私の記憶が途切れた・・・

拘明き編　～迷イ子ノ精魂～

～生徒棟１Ｆ　１年廊下　１０月１９日火曜日　３：５２～

・・・眠い・・・すごく眠い・・・

あれ・・・１年Ｂ組の教室が近いのに・・・おかしいな

「なぁ、加藤・・・何かおかしくないか？」

「・・・ん？　何が？」

「ほら・・・みんなの声・・・聞こえなくね？」

「寝てるんじゃないの？」

・・・たしかに・・・平日にこんな遅くまで起きてる人はいるのだろうか？

「あっ・・・俺トイレ行って来るわ」

「ここで待ってるから・・・はやくしろよ？」

「ああ、サンキューな」

そう言いながら廊下の曲がり角を曲がり、トイレのある方向へと向かって行った・・・

眠いし、お腹もすいてきた・・・１年Ｄ組の教室を覗き、時計を見ると・・・４時近くなのであった・・

はやく親とか気付いて警察に電話してくれないかな・・・秋の夜更けの廊下は凄く寒かったが、今は睡魔の方が強かった。　そうして俺は・・・我慢しきれなくなり、目を閉じてしまった。

・・・・・・・・・・・・・・・。

何時間経ったのだろう・・・俺は寒さで目を覚まし、再度時計を見た・・・

４時５２分

・・・良く眠ってて殺されなかったな・・・運が良いのやら何なのやら・・・その時だった

ピーンポーンパーンポーン・・・・

校内放送？　・・・嘘・・・生きてる先生が居たの？

「みなさん、おはようございます。　私は真神と申します・・・どうぞよろしくお願い致します。

さて、私はこの学校の平和のため、毎年生徒を何人か頂戴して参りましたが・・・またとある理由により、それを解除させていただきました。　現在この学校に残って居ますのは３人ですが・・・全員回収に終えるまで２時間もかかりません。　それではご健闘をお祈り申し上げます」

・・・何だったんだ？　・・・本当に・・・神様からだと？

・・・あ、真悟！　真悟が居ない！　俺は、心配になり・・・トイレに向かってみた

～１年男子トイレ　１０月１９日火曜日　５：０２～

「加藤！　居るか？　返事しろ！」

俺は、一つずつ個室のドアを開けてみた。　だが、真悟は何処にも居なかった・・・

悪い予感が頭を過ぎる・・・もしかしたら・・・犯人に見つかって・・・？

でも、１年Ｂ組の教室で待ってるに違いない・・・　少しの希望だが・・・居なければ・・・

～１年Ｂ組教室　１０月１９日火曜日　５：０７～

「みんな・・・？」

入った瞬間、異様な臭いに包まれた。　・・・教室の隅に真菜が横たわっていたが・・・額に・・・

「う・・・・う・・」

あまりにも凄まじい臭いだったので、教室の前にあったゴミ箱に駆け寄り・・・吐いた。

そして何気なく左を向いてみると・・・・

「う・・・うわあぁぁぁ！」

誠也が黒板付近に横たわっていた・・・でも、全身赤くなっており・・・どう見ても死んでいた

俺は教室を出た・・・そして、がむしゃらに走って逃げた・・・

拘明き編（2）　～進展ノ夜月～

・・・途中で気付いたのだが、あの神様を名乗る人は「学校に残っている人は3人」と言ったが、
俺、香奈子、真悟、海堵の４人の筈なのだ。
でも、3人と言っていた・・・。
つまり、香奈子、真悟、海堵の誰かが死んでいる・・・これで筋は通るのだ。
そこで、その死んでいる可能性について探ってみることにした・・・
まず、真悟だ・・・　真悟は、トイレに行ったまま行方不明（祟られた？）なのだ。
戻って来ているのなら、俺のことをたたき起こすだろう・・・生きているのなら、どこかを探検しているはずなのだ・・・（でも、ゲーム好きだから・・・単独行動の危険さは分かっているはず・・・）
次に香奈子である。　香奈子と誠也と真菜は1年B組の教室で待機していると言った・・・
そして、俺達が戻ってきたら・・・誠也と真菜は死んでいて・・・
香奈子は行方不明なのだ
（もしかして、この事件が人の手によるものなら・・・香奈子が犯人？）
最後に海堵である。　・・・良く分からないが・・・別室で寝ていたら犯人に見つかって・・・何てことも有り得るのかもしれない・・・今まで見かけなかったので行方不明だ
その神様と名乗る人物（以下から犯人）は・・・つまり「生存者は3人」だと言っていた事にになる。

つまり、ここで二つに別れるのだ・・・・

1、文化祭の終わりと同時に、この学校に忍び込み・・・犯行を行った。
（でも、この仮説だと・・・海堵、香奈子、真悟の誰かが死んで居なければおかしいのだ・・・）

2、一番考えたくないが・・・この四人の中に犯人がいるか・・・である。
（この仮説なら、忍び込む必要もないし・・・チャンスはいくらでもあるのだ）

第一、犯人は神様で・・・誰も犯人ではないのだろうか？　・・・そう考えたかった。
でも、この世は全部人で説明が付くのだ・・・そんなオカルトティックな・・・
だから、消去法により・・・香奈子、真悟、海堵の三人を疑わなくてはいけないのだ・・・

ピーンポーンパーンポーン・・・

「すみません・・・言い忘れていたことがありました。　今、1年B組の「加藤真悟」様をこちらでお預かりしております。　誘拐と言った方が分かりやすいでしょうか？　５：４５分までに探し出してください。　それを過ぎましたら、加藤真悟様を頂戴致します・・・それでは」

「え・・・・？」

誘拐されたのか？　・・・嘘だろ・・・・？　俺は信じられずに

居た・・・

「おお、高橋・・・久しぶり」

「って！　永山・・・」

「な～に幽霊でも見た顔してんだよ」

「え・・・お前・・」

「なんだよ・・・人を勝手に殺すな。　こっちも大変だったぜ？　ナイフが飛んできたり・・・犯人と鬼ごっこしたり・・・」

「そ、そうか・・・」

海堵が生きていた・・・そして真悟が誘拐された・・・これはつまり、「香奈子が死んでいるか、犯人か」になってしまう・・・

「な～んか大変な事になってんな・・・加藤が誘拐されたらしいじゃん？」

「ああ、永山も放送聞いたのか？」

「ああ・・・まったく・・・めんどくせ～事になってんな」

「・・・永山はどう思う？」

「あ？　・・・ああ、加藤の行方か？」

「ああ・・・」

「ん～・・・放送室に近いところ？」

「ああ・・・なるほどな」

つまり、犯人は放送室で放送した後・・・急いで隠れたのだ。　・・・放送を聞きつけた俺達が探しに来たら見つかる可能性があるからな・・・

「・・・そう言えば騒がしいみんなはよ？」

「え？」

「だから・・・ほら、倉橋とか・・・水島とか？」
「・・・みんな殺されたよ」
・・・海堵は教室に戻らなかったのか・・・なるほどな
「・・・そうか」
と、興味なさそうに頷いた
「じゃ、俺の言うとおりになったな」
「え？」
「犯人は小山先生で決まりじゃね？」
「ああ・・・小山先生・・・」
「どうしたんだよ？」
「・・・職員室で死んでたよ」
っと、告げると・・・戸惑った様子で驚いていた
「マジかよ・・・じゃ、犯人は・・・」
「・・・あ、そう言えば校長先生を見なかったか？」
「校長？」
「ほら・・・居たじゃん」
「ん～・・・死んでるんじゃね？」
・・・さらって言ったぞ？　・・・死ぬって・・・お前な・・・
「生きてる確率は低いな・・・」
「どうして・・・だ？」
「・・・じゃ、校長は生きててのんびり寝ている・・・って言いたいのか？」

「・・・それは・・・無いな・・・」
「だろ？　・・・一昨日は良いとして・・・・昨日辺りに死んでなければおかしいだろ？」
「たしかに・・・」

でも、生存人数や・・・すべて頂戴ってのも犯人の証言が大前提になってる・・・だから確かめようがないのだ

「・・・じゃ・・・校長室見てみる？」
「え・・・？」
「生きていて対策を練ってくれていたら・・・良いんだけどな」
「・・・やめておこう」
「・・・だな」

言いたくはないが、死体をみるのは・・・もううんざりだ

「・・・なんだ・・・これ」
「あ・・・真悟のペンダントじゃん・・・」
「ん・・・もしかして・・・あの教室じゃね？」

・・・海堵は、この先にあった・・・たった一つの空き教室を指した。　・・・なるほどな・・・
ペンダントがあるって事は・・・ここを通ったと言う証拠だ。　この先には行き止まりで空き教室一つしかないのだ・・・

「っと・・・俺はトイレに行って来るな」
「俺も付いていく」
「・・・お前も・・・か？」
「いや・・・外で待ってる」
「お前は早く行ってやれ・・・」

「ここで一人になるのは・・・危険だ」
「俺だって何度も狙われてんだから大丈夫だよ」
「でも・・・」
「制限時間・・・あと１０分も無いぞ？」
「お・・・おう・・・」

そして、俺は空き教室に向かい・・・海堵はトイレに向かって行った・・・

拘明き編（3）　～奇術ノ終焉～

～特別棟１Ｆ　物置教室　１０月１９日火曜日　５：３９～

「加藤・・・！」

俺は勢い良く教室の扉を開けた。　中が真っ暗だったのでその教室の電気を付ける・・・

「加藤！」

「が・・・ぐ、っぐぐ・・・」

真悟が首を吊っていたのだ。　俺は急いで縄を解こうとしたが結び目が高すぎて解けない・・・

肩車や無理矢理引っ張ったりと試行錯誤を繰り返しても解けなかった・・・

「加藤！　頑張れよ・・・！」

教室内を見渡しても何故か机と椅子が綺麗に無い・・・犯人の仕業だろう。　・・・俺はとなりの教室から机を持ってくるために物置教室を出た・・・

・・・机を持ってさっきの教室に入ろうとしたが・・・

「は・・・え・・・何で！」

鍵がかかっていて開かないのだ・・・俺は何とかして抉じ開け中に入ってみると・・・

「加藤・・・・？」
「・・・・・・」
返事は無かった・・・もう遅いようだ・・・　俺はイラついて机を投げ捨て、廊下へ出た・・・

～特別棟１Ｆ　廊下　１０月１９日　５：４６～

「・・・・・・」
ピーンポーンパーンポーン・・・
「時間内に救出出来なかったため、加藤真悟様を頂戴いたしました。もうすぐ夜は更けます・・・さて、私は誰でしょう？」

「・・・・・・」
「おお、高橋！　・・・で、どうだった？」
「・・・・・・・・」
「・・・そっか・・・さっき犯人から放送があったろ？　・・・誰が放送してるのかなって覗いて見たんだけど・・・誰も居なかった。ま、犯人はもう決まってるがな」

「やっぱり・・・」
「そうだ、犯人は「佐野香奈子」なんだよ。行方不明の・・・」
「じゃあ、お前が犯人じゃないって証拠はあるのかよ？」
「証拠？　警察が来れば何もかも晒される。　その時に証明してやるよ」
「そうか・・・」

はっきり言って俺も香奈子も海堵もアリバイが無い・・・・もしかしたら死んだ誰かが犯人なのか？
それとも・・・犯人は真神様なのか・・・・？
・・・・もう疲れた・・・・

「・・・ああ、俺休んで来るわ」
「おう、気を付けろよな？」

・・・・そして俺は眠りに付いた・・・・

拘明き編（４）　～報晒シ～

～捜査資料～

１９９３年１０月１９日　○×県鶴ヶ峰市祭金にある　高校で殺人事件がありました。事件発覚は遅かったもので、死者は１人を除き全校生徒全員と教員を確認。　おぞましい大量殺人であった

（事件発覚日　１９９３年　１０月２０日）

「死亡者・行方不明者リスト」　（これは極秘で扱うように）

死亡
小山淳子（こやま あつこ）　２９歳　職業：教員（１年Ｂ組担任）　発覚日既に死亡
田川義惟（たがわ よしただ）５９歳　職業：教員（現校長）　発覚日既に死亡
倉橋誠也（くらばし せいや）１６歳　職業：学生（１年Ｂ組五班）　発覚日既に死亡
水島真菜（みずしま まな）　１５歳　職業：学生（１年Ｂ組五班）　発覚日既に死亡
坂井拓海（さかい たくみ）　１５歳　職業：学生（１年Ｄ組三班）　発覚日既に死亡
前苑奈菜子（まえぞの ななこ）１５歳　職業：学生（１年Ｄ組三班）　発覚日既に死亡
加藤真悟（かとう しんご）　１５歳　職業：学生（１年Ｂ組五班）　発覚日既に死亡
佐野香奈子（さの かなこ）　１５歳　職業：学生（１年Ｂ組五班）　発覚日既に死亡
高橋渓太（たかはし けいた）１６歳　職業：学生（１年Ｂ組五班）　発覚日既に死亡

なお、この事件で唯一生存者が出た。

永山海堵（ながやま かいと）　１５歳　職業：学生（１年Ｂ組五班）　発覚日生存

この人物は県内のある病院へ搬送された。　県警はこの人物が犯人だと睨んでいるが証拠がないのだ。
取調べや現場検証の結果、１９９３年１１月４日・・・この事件は不幸な事故・・・と言う事で片付けられた。

永山海堵、１９９３年１１月５日・・・心臓麻痺により、病院内で息を引き取った・・・

そして事件は闇へと葬られた・・・

ピーンポーンパーンポーン・・・

「さて、私は誰だったのでしょうか？　・・・正解は何度も申しておりますように、私は「真神」です。　・・・え？　これは人の犯行だったと・・・？　では、もし暇な時に読み返して私にあなたの推理を聞かせてください。　でも、忘れないでください。　犯人は「私」と言う事を・・・では、またご縁があれば・・・また会いましょう」

拘明き編（4）　～報晒シ～（後書き）

さて、お疲れ様でした！　皆さんがより良く推理を楽しめるようにあえてバッドエンドに終わらせてみたのですが・・・如何でしたか？　次回からは捜査編に入ります。　警察の皆さんの推理を参考にして考えて見えください

暗灯し編　～神ノ誘イ～

～御真神学院高等学校内　１９９３年１０月２２日金曜日　１６：２９～

「・・・お疲れ様です」
「あ、警部殿！」

二十後半くらいの男性が警察手帳を見張りの警官に見せ、現場に踏み込んだ・・・この男性は岩倉和樹（いわくらかずき）・・・鶴ヶ峰署の刑事だ。階級はさきほども出したが警部。

「・・・お疲れ様です・・警視」
「ああ、岩倉君か・・・お疲れ様」
「・・・初動捜査は？」
「相変わらずだな・・・手掛かり一つ無い。・・・犯人はプロか？」
「・・・なるほど」

この人は倉持高彦（くらもちたかひこ）・・・署ではベテランの刑事だ。　もちろん、一課の警視である・・・

「で、さきほど気になること・・・とお電話を頂いたのですが？」
「ああ、そうなんだよ。・・・どうも気になる点があってな」
「・・・それは？」

「死亡推定時刻が一部の生徒だけ他とは違うのだよ・・・例えば・・・」
「ああ、例えば・・・高橋氏・・・とかでしょうか？　資料を見る

限り・・・死亡推定時刻は早朝５：３４～６：００だと・・・」
「ああ、そうなんだよ・・・現場を見てみるか？」
「・・・はい、一応・・・」

～特別棟１Ｆ　廊下　１０月２２日金曜日　１６：４２～

「・・・・・・」

初動捜査中だったので死体そのものは無かったが、床と壁にこびり付いた血の後と白い人型のラインで如何言うものかははっきり分かった・・・

「警視・・・この格好って・・・」
「恐らく・・・眠っている時に刺されたんでしょうな」
「人が無抵抗なときに・・・何て卑怯な犯人！」
「・・・ああ、そこの奥の部屋にも一名・・・」
「たしか・・・加藤氏でしたっけ？　・・・死因は窒息死と？」
「ああ・・・首を吊った状態で発見された」
「・・・気が狂うのも仕方ないと思います」
「・・・それが・・・気になるのだよ」
「・・・と、言いますと？」
「・・・首元と指先が・・・血だらけだったのだよ」
「それは・・・つまり、加藤氏の死後に首を吊らされた・・・と？」
「いいや・・・あれは爪だったんだ。・・・彼の爪から彼の首の皮膚痕が検出されたそうだ・・・」
「・・・自分で喉を引っ掻いたと？」
「良いや・・・もしかすると、縄を解こうとして引っ掻いた可能性があるのだよ」

「・・・つまり、他殺・・・・と？」
「だろうな・・・」
・・・私は警視の言葉に耳を傾けながら学校中を回った・・・
「・・・警視、これは・・・・？」
「ああ、これかね？」
途中で床に血の痕跡と白いロープが人型を作っている場所があった・・・
「・・・はい。　誰のものでしょう？」
「これは・・・佐野氏のものだ」
「佐野・・・？　って佐野香奈子ですか？」
「ああ、その通りだ・・・」
「死因は失血死・・・ナイフか何かが刺さってあったとか？」
「うむ・・・また腹部にナイフが刺さっていた状態だった・・・」
「腹部？　首元では無かったのですか？」
「ああ。　犯人にしては不確実な殺し方だ・・・それも気になる点なのだよ」
「犯人に偶然遭遇して・・・・とか？」
「たしかに・・・それなら一理あるな」
「自殺の可能性は・・・・？」
「一応ある・・・犯行に使われた全ナイフには指紋が検出されなかった」
「・・・完全犯罪・・・・って事ですか？」
「・・・そうだな」
私達は学校中を回った・・・それについて語って行きたいと思う

暗灯し編（2）～邪心ノ様～

「・・・そう言えば警視。私も気になる事が・・」
「ん？　何だね・・・？」
「この学校に～・・・トイレは無いのでしょうか？」
「ああ、あるけど・・・行くのかね？」
「いいえ・・・たしか電気って、ゴムに弱いのでしたっけ？」
「ああ・・・忘れてたね」
「どうして死ぬ前に彼らは気付かなかったのでしょう・・・？」
「・・・ま、それはこの事件の唯一の生存者さんに聞く事だね」
「あ、分かりました・・・中央総合病院でしたっけ？」
「ああ。第二病棟の７０５番室の個室だからすぐ分かると思う」
「ありがとうございます。・・・では、失礼します」

～中央総合病院第二病棟７Ｆ廊下　１０月２２日金曜日　１８：４２～

この時間になると少々暗くなってくるので、早く済ませようと思った・・・そして、五番目の個室にノックする・・・

「・・・こんばんは。鶴ヶ峰署の岩倉と申しますが・・・」
「どうぞ・・・」
「失礼します・・・」

淡白な声が聞こえた後、私は静かに病室に入る。　彼は随分疲れきっている様子で俯いていた

「・・・何度もすみませんが、お話よろしいですか？」
「・・・検査がありますので・・・手短に」

たしか彼は・・・中学生の時諸事情があり、グレていた・・・と高校の資料に書いてあったが・・・
随分大人しいものである・・・

「さて・・・じゃ、単刀直入に聞きます。・・・犯人を見ましたか？」
「見ましたが・・・アレは人ではありません」
「・・・と、言うと？」
「・・・凄く・・・暗いものを吐き散らしながら人を殺していく・・・邪神・・・と言った方がいいでしょうか？」

「暗いもの・・・と言うと？」
「人のマイナスの感情です・・・」
「・・・ありがとうございます。　・・・？」

私は主治医に借りた診断表を見た。　・・・精神に大きな傷がある・・・と。　ま、当然なのかもしれない・・・彼は大量殺人の唯一の目撃者なのだ。　・・・本部は彼が犯人だと思っているらしいが、私はそうは見えなかった。

「あ、すみません・・・面会時間終了なのですが・・・」

と、看護婦さんらしい女性が入って来て・・・そう告げた

「ああ、じゃ・・・最後に一つだけ・・・」
「・・・なんでしょう？」
「・・・君たちは・・・どうしてゴム手袋を使わなかったの？」
「・・・・・・パニックで・・・忘れてました」

彼の眉が少し動いたような気がした。　・・・何か・・・隠してるのか？

「じゃ、分かりました・・・失礼しました」

と、私は頭を下げて退室した・・・

さて、これで終わります。　・・・ああ、一つ皆さんに提示しなければいけない付箋が・・・

この物語は「全てが真実とは限らない」と言う事です。　この言葉の解釈は皆さんにお任せします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9154u/

Murder　Carnival

2011年11月15日23時45分発行